

ウィルキー・コリンズ作

藤岡啓介訳

死者は生きていた

The Dead Alive by Wilkie Collins, Translated by Keisuke Fujioka

第一章 病氣といわれて

「心臓はいいし、肺も問題なし。診たところ、臓器に異常はないようです。さてさて、フリップ・レフランク、何も心配はないようですよ。いまのところ、とても死ぬなんて考えられない。あんたが病氣と言っているのは、おそらく、過労だな。ちよつどいいから、しばらく休養をとりなさい、それが何よりの療法ですね」

半時間ほど前だったか、事務所です仕事をしていて卒倒してしまい、驚いた書記が医者を呼んだのだが、診立てはこんな調子だった。大げさに言つつもりはないが、少々状況を説明しておいた方がいいだろう。このとき、私はロンドンのテンブルで弁護士事務所を開いていた。いわゆる「ジュニア」といわれる下級法廷弁護士だが、前途有望、というところだった。英国王室保護領といってもフランスに近いチャネル諸島のジャージー島の出身で、何世代か昔は、私のフランス語綴りの名前「レフラン（Lefranc）」の末尾が英語化されてkになつていた。現代では末尾がcで終わる言葉がkで結ばれていたのだが、それはさておき、私たちはジャージー出身の一族として誇り高く暮らしているといつていいだろう。もっとも、私が英国法曹界の一員であることを耳にすると、今日でも郷里の父親は苦々しく思っているのだが、「休養だつて！」

医者の診立てをきいて、思わず繰り返し返してしまった。

「冗談じゃない、今の時期、何だと思ってるんです。開廷期ですよ。法廷が開かれているんだ。机の上を見てくださいよ、これから処理する事件の山だ！ 休養するなんて、ぼくににとっては破滅そのものだ」

「そして仕事するなんて、死そのものですよ」医者は静かにこつ加えた。

はつとした。私をおどかさうとしたのではない。彼は率直に、本音をいったのだ。

「たんに時間の問題じゃない、遅かれ早かれ困ったことになりますよ。あなたはそもそもが丈夫な人だし、なんといつても若い。だからといって、これ以上脳細胞を酷使してはだめですね。神経系統がおかしくなっていますよ。すぐにでも出掛けなさい。船酔いしないようなら、航海がいい。外洋の空気が何より、鍛え直すにもつてこいだ。お分かりですね。処方箋は書きませんよ。薬は出しません。ほかに、言つことなし」

友人らしく医者はこう言い残して出て行った。わたしは彼の言つことをきかずに、「この口、

法廷に出ていた。

わたしが参加していた事件で、上席弁護士から「あの件の調べはどうなったか」と聞かれたのだが、それがどうしたことだろう、いつもと違って考えがまとまらない。事実と日時が、頭の中でめちゃくちゃに混ざり合っていた。そもそもが、わたしの責任で調べ上げていたはずだった。啞然として、自分が怖くなった。呆然としたまま、法廷から連れ出された。翌日預かっていた一件書類を弁護士団に送り返し、医者への忠告通りに迷わず、わたしは最初に出るニューヨーク行き乗りこみ、アメリカへと旅立った。

わたしはアメリカ航路を選んだのだが、あちこちと船旅を重ねるよりも、アメリカ行きの大航海に期するものがあつた。だいぶ昔の話だが、母の親戚が合衆国に移民して、農場をやつて成功していた。もし大西洋を渡つて当地においでならお立ち寄りを、と便りをくれていた。医者の下した診断結果とはいえ、「休養」という名目で何もしないで長期間ぶらぶらしているなら、せつかくの親戚だ、彼のところを訪ねてみよう、その暮らしぶりをみて、アメリカがどのようなところか知ることができよう、この方がよほど楽しい休養になる、と考へたのだつた。ニューヨークに少し滞在してから、汽車でモルウィック農場のアイザック・メドウクロフト氏の居住地に向かつて出発した。そこがわたしの選んだ保養地だつた。

雄大な自然の景観が連なり、アメリカ創世記の地勢が露呈していた。そしてまた、その驚きをなだめる配剤とでもいうのだろうか、この新天地には旅行者があきれ果てるほどに平坦で、単調な風景の続く地方があるのだが、それもこのアメリカという大地が表わす景観のひとつといえよう。メドウクロフト氏の農場のある地方は、この後者の部類に含まれている。モルウィック駅で車両を出てプラットフォームに下り、あたりを見渡したとき、思わず「ぼんやり療法がお勧めだというなら、ここはまさに狙い通りの場所ではないか」と、つぶやいた。

こういつてしまったが、この後でわたしが巻き込まれた事件を思うと、そう、だれだつてこの場に立てば同じことを言つただらうが、いかにも軽率な言葉だつた。だれしも、いつ何ぞき思いがけない事態に遭遇するか知れない、軽率にもそう判断し、考へていたのだつた。駅では、メドウクロフト氏の長男、アンブローズが待つていて、馬車で農場に行くことになつた。わたしがモルウィックに到着してから奇妙な、恐ろしい事件が続いたのだが、アンブローズの様子からそうした前兆などまったく感じなかつた。どこでも見受けるような、健康でいい男前の若者だつた。「今日は、ルフランクさん、さつ、バギーに飛び乗つて。鞆は内の者にまかせておけばいいから」と挨拶があつて、わたしも同じ程度に丁寧に、「ありがとう、お家では皆さんお元気ですか」と、ありきたりの返事をした。こうして農場へと出発した。

道々話をしたのだが、まずは農業や牧畜が話題になつた。ところが、馬車がほんの少し走り出したところで、わたしが糞り入れや乳絞りにまつたく無知であるのが知れてしまつた。アンブローズが話を変えようとしたがうまくいかない。そこでわたしが切り出すことになり、思いつきで、この訪問が都合のいいときだつたかどうか訊いてみると、若い農夫の日晒

けしてこわばった表情がぱつと明るくなった。大当たりだった。偶然にも、彼が話すものかどうか、うずうず迷っていた話題に触れたのだった。

「いつが好都合かかっていえば、今が最高ですよ。今まで、これほど愉快にやっていたことがないんだから」

「お宅に、だれかお客さんが来ているのですか？」

「お客さんといえるかどうか。最近いっしょに暮らすことになった、新しい家族の一員ともいうのかな」

「新しい家族の一員ですって！ それは一体だれなんです？」

すぐには答えず、アンブローズはなにやら思索しているようで、馬にムチをやったり、はにかんで言い淀んだかと思うと、いきなり、率直この上ないという調子で打ち明けてきた。

「ものすごく素敵な女の子で、あんただって、きつとびっくり仰天だ」

「おやまあ。それじゃ、きみの姉さんの友達かな？」

「友達？とんでもない！うちのかわいい従妹ですよ、アメリカ娘、ナオミ・コールブルックですよ」

そういえば、ずいぶんと大昔の話だが、叔父メドウクロフトの妹さんがアメリカ人の商人と結婚していたのだが、かなり以前に子供を一人残して亡くなった、ときいていた。父親も死んでしまったという話は今知ったのだが、父親は実際のきわに、他に頼るところのない娘ナオミのことを、このモルウィックにいる亡き妻の親戚にくれぐれもよろしくと託したのだらう。

「あの人は投機に手を出しては」とアンブローズは続けた。「つぎからつぎへと失敗ばかりして、死んだときは遺産どころか、葬式を出すのが精いっぱいだったといえます。だから、うちの父はアメリカ娘の従姉妹がどんな風に育ったものか、ここにやってくるまで、ちょっとばかり心配していました。だってそうでしょう、ぼくらは英国人です。そりゃ、今は合衆国に住んでいます、英国流の暮らし方や習慣はすっかり守っているんですから。あえていうならアメリカ女はさほど好きじゃない。でも、ナオミが姿を見せるや、ぼくら家族全員を征服してしまいましたよ。」

すてきな娘ですよ！すぐに家族の一員になりました。一週間もしないうちに、自分で乳しぼりを覚え、立派な働き手になりましたよ。まだ、ほんの二ヶ月しかいっしょでないんですよ、でもいいですか、彼女がいなかったら、これまで、いったいどんな風に仕事をやってきたんだらうって、家中の者が、そう思っているんですよ」

話がナオミのこととなると、アンブローズはもうとどまるどころがない、一気に話した。アメリカ娘がこの一家に与えた印象がどれほど衝撃的だったか、改めて、偉大なる天与の洞察力「などもちだすまでもないだろう。若者の感激ぶりがわたしにも伝わってきた。といっても、その度合いはアンブローズのそれとは比べものにならないが、話のナオミに会うと思うと、心なしか胸が躍るようだった。夕闇がせまり、馬車はモルウィック農場のゲートに近づいた。

第二章 新しい家族

到着すると、すぐさま父親のミスター・メドウクロフトのところに案内された。老人は長いことリウマチを患っていて、椅子に坐ったままだった。わたしをやさしく出迎えてくれたが、どこか疲れた様子があった。部屋には未婚の娘さんがいて、ずいぶん以前に亡くなった母親の代わりに、父親の面倒を見ていた。この一人娘は見たところこれといって魅力のない、かなりの年のいった陰気な人だった。いやいやながらこの世の義理を果たしているといったタイプの人で、生きていくのが重荷で、もしこの荷を担ぐかどうかを最初から問われていたならもちろんお断りしていたことだろう。壁になんの飾りもない居間であっさりと挨拶をしてから、どうにか二階に上がり自分の部屋で荷をとくことになった。

「夕食は九時になりますよ」とミス・メドウクロフトがいった。

彼女の言う、この「夕食」とい言葉が、常習的に男たちが家庭で犯している犯罪でもあるかのように、そして女たちがそれにじっと耐えているかのように聞こえた。下男が部屋に案内した。どうやらわたしの農場初体験は芳しいものではないようだった。

こうして落ち着いてはみたが、ナオミもいなければ恋物語のひとかけも見当たらない。部屋はといえば、清潔すぎて圧倒されるほどだった。部屋には小机と書架があって、聖書と祈祷書だけが収まっていた。窓から外を見ると、平原の大部分がまだ開墾されないまま残っていて、荒涼とした大地がひっそりと横たわっていた。白いベッドがこざっぱりと整えられていた。頭の上には軸がかかっていて、聖書からの断罪の言葉が赤と黒の飾り文字で書かれていた。ミス・メドウクロフトの陰気な霊がさつと部屋をかすめていって、せつかくの寝室に暗い影を落としていた。辺りを見わたしたが、気分が沈むだけだった。彼女がいまいまして予告した大行事の夕食はまだ先のことだ、だいぶ時間があった。ロウソクを灯し、靴からフランス小説を取り出したが、あの大デュマのお色気たっぶりの傑作から選んできたものだったので、このメドウクロフト農場開闢以来の最大珍事といえるかもしれない。五分ほどで、わたしは新世界に入りこみ、陰気だった部屋はたちまち陽気なフランス一座の面々でいっぱいになった。そうしているうちに、食事の鐘が鳴った。有無をいわせない、妥協の余地のない絶対的な響きで、現実世界に呼び戻された。時計を見た。ちょうど九時だった。

アンブローズが階段の下で待っていて、食堂へと案内してくれた。

メドウクロフト老人の車椅子がテーブルの上座にでんとおさまっていた。右側には陰気で無口の娘が坐っていた。彼女がわたしに父親の左側につくよう合図をしたが、まるで亡霊の仕草のように物々しく思えた。このとき、サイラス・メドウクロフトが入ってきて、アンブローズがこの兄弟をわたしに紹介した。アンブローズの方が背が高く顔立ちも整っていたが、二人はよく似ていてこの一族の者であるのは間違いない。だが、二人の顔を見たところ、これといった特徴がみられず、まだ一人前の男になりきっていないように思えた。いい奴になるのか、その反対か、いずれにしてもこの先どういう暮らし方をするかによって、それぞれの特徴がはっきりと定まってくるのだろうか。

こうして二人の兄弟をみているとき、正直いって、この兄弟にはよい印象がもてなかったのだが、再びドアが開いた。初めて対面する身内の男で、部屋に入ってきたとき、すぐさまこの男のことが気になった。

背が低く、どちらかといえば痩せぎすで、筋ばっていた。こうした田舎ですつと暮らしていたにしては、意外に青白い肌だった。それだけではない、どこをとつても、彼の顔立ちは何目もひく代物だった。顔の下半分にあたる口も顎も、黒々と髭を生やしていた。当時、アメリカでは口ひげを剃るのが普通だったし、顎ひげはめったに見られるものではなかった。顔の上半分はどうだろう。茶色をした二つの目がぎらぎらと、野卑な光を放っていて、この表情をみて、何かこの男の精神生活が常軌に外れているように思えた。言うこと為すこと、いずれも完全に正常な人物であるのに、彼の茶色の目に何か潜んでいるような気がした。ひどく腹を立てたときなど、これまで見せたことのないような暴力をふるったり、愚かな行為に走り、長い付き合いの友人たちを驚かせる男がいる。「ちょっといかれた奴」——流行りの言葉でいえばこうなるだろう。食事の場に現われた初対面の男だったが、こうした印象があった。

メドウクロフト老人はそれまでまったく口を閉ざしていたが、すすんでこの初対面の人物をわたしに紹介した。ちらりと息子たちを見やっていたが、その視線にはどこか挑むようなところがあった。この老人の視線を、二人の若者たちは臆せず跳ね返していたが、なんとも痛ましい親子のやり取りに思えた。

「フィリップ、こちらが管理人のミスター・ジェイゴだ」といってわたしたちを正式に引き合わせた。「ジョン・ジェイゴ、こちらの青年が家内の縁者で、ミスター・ルフランクだ。身体を悪くして、静養のため大西洋を渡ってきたんだ、いわゆる転地だ。いいかねフィリップ、ミスター・ジェイゴはアメリカ人だ。きみがアメリカ人に偏見をもっていなければいいが。ミスター・ジェイゴと並んで坐り、好（よしみ）を通じてくれ」

こういうと、老人はまた息子たちに暗い視線を走らせたが、息子たちも同じようにお返しをしていた。

わたしの隣は空席だったが、そこにジョン・ジェイゴが近づいてくると、息子たちはあからさまに彼を避けて、テーブルの反対側に動いていった。あこ髭男が父親の大のお気に入りであるのが気に食わない、さらに、どんな理由があるのか分からないが息子たちがひどくジェイゴを憎んでいるのが読み取れた。

ドアがふたたび開き、若い娘さんが夕食の席に静かに加わった。この娘こそ、ナオミ・コールブルックではないか。わたしはアンブローズの顔を見ると、はっきり答えていた。いよいよ、ナオミ・コールブルックのお出ましだ！

かわいらしい娘さんで、その容姿を見ただけの感じからいえば、気立てもいいにちがいない。どんな様子をしているか、およそのことをいうと、顔は小さく、形よく、すくっと肩におさまっていた。明るいグレーの眼をしていて、その眼でまっすぐに見つめ、相手の思つことを読みとってしまう。身体つきは細く、小柄だったが、わたしたち英国人の美的概念から

いえば、少々細すぎる感があった。言葉もアメリカ訛りが強かった。といっても、これはアメリカで珍しいことなのだが、彼女の声には耳に快い響きがあって、その訛りは英国人の耳にも感じよく聞こえた。

第一印象はたいてい間違いないというが、わたしは一目でナオミ・コールブルックが好きになった。その快活な微笑みも好きだったし、私たちが互いに紹介されたときの、彼女の心のこもった握手も好きになってしまった。「この家で、だれともうまくいかなくても、ナオミ、あなたとなら、きっと上手にやっていける」思わず、心のうちでこうつぶやいた。

このときだけのことだが、わたしは本物の預言者だったといえる。モルウィック農場では憎しみが鬱積し、渦巻いているようだったが、その中で、このかわいらしいアメリカ娘とわたしは最初から最後まで友情堅固な仲間だった。アンブローズがナオミのために自分たち兄弟の間に席を作った。ナオミはちよつと頬を染めたが、椅子に手をやりながら、どこか娘らしい、隠すにも隠しようのない優しさを見せてアンブローズを見た。私の眼には、この若い農夫がテーブルクロスの下でひそかに彼女の手を握っているように見えた。

夕食は楽しいものとはいええず、楽しいとすれば、テーブル越しにナオミとわたしがかわした会話だけだった。

何か理由があつてのことだろうが、ジョン・ジェイゴは自分と同じアメリカ人であるナオミがいると、少しも寛いでいないように思えた。手元の皿から眼をあげて、探るようにナオミを見るかと思えば、眉を寄せ、その視線をゆっくりと戻すのだった。わたしが彼に話しかけても、いやいや応えるといった様子だし、自分がメドウクロフト老に話すときでもどこか構えたようにみえたが、そうしたとき、その視線は一人の若者に向けられているようだった。食事になったとき、サイラス・メドウクロフトの左手にギブスがあてがわれ、肩から吊るしているのに初めて気がついた。そこで注意して見ていると、ジョン・ジェイゴがその茶色い眼を走らせて、テーブルについている人たちに順繰りにちらちらと眼をやっていったのだが、サイラスのギブスの左手にも、好奇心たつぷりな意地の悪い詮索の眼を向けていた。

こうして農場訪問第一夜が始まったのだが、客人であるわたしにとって至極迷惑なことが目についた。父親である主と息子たちが、何とということだろう、直接面と向かうことなく、ときにはジェイゴを通して、ときにはわたしを通して、互いに間接的に話していたのだった。メドウクラフト老は、農場の耕作地でこれまで何度か管理ミスがあつたが、それを任せていたのがほれ、とさも忌々しげにジェイゴに話すのだが、その眼は二人の息子たちにびたりと据えて、あからさまに憎しみをぶつけていた。一方、息子たちはといえば、ごく一般的なことで動物についてわたしが無知をさらけ出したとき、それをわざわざ羊と牡牛の管理の話にもっていき、皮肉っぽい調子でわたしに教えていたのだが、彼らの視線はジョン・ジェイゴに向けられていた。

これまで何度か経験していたが、こうした気まずい雰囲気になると、ナオミがちよつどいいタイミングで話に割り込んで、さし障りのない話題へと変えてしまう。おかげで一座が和やかになるのだが、メランコリーのミス・メドウクロフトには彼女が話題を逸らせたのが

面白くなく、ゆっくりと向き直ると、険しい目つきでじっと見つめていた。

これまで、これほどに殺伐とした、仲の悪い一家と席を同じくしたことはなかった。ねたみ、憎しみ、悪意、無慈悲な気持ち、それがうわべは礼儀正しく振まっっているように見えても、わたしにはとうてい耐えられないものだった。しかしわたしはナオミに強く気をひかれていたし、それに、彼女とアンブローズとの間でときおり交わされる、ちょっとした恋の仕草にもびっくりしていたし、気にもなっていた。それでもなければ、こうした食事の席など中座して、例のフランス小説の待つ自分の部屋に避難していたに違いない。

仰々しい盛りつけの料理がいく皿もでてきたが、ついに、このうんざりするような食事が終わった。ミス・メドウクロフトが音もなく敵めしく立ち上がり、さあ御席を立ちなさい、とうながした。

「農場では皆さん早起きですよ、ミスター・ルフランク、どうぞお休みなさい」

こういうと、メドウクロフト老がわたしに挨拶をしているのを遮り、骨ばった手を老人の車椅子の背にかけ寝室へと押していったが、まるで寝室ならぬ墓場へと椅子を転がしていくように見えた。

「このまま部屋に行かれますか？よかつたらシガーでもこいっしょしませんか。もつとも、お若い紳士方にお許し願わなければなりませんか」。ジョン・ジェイゴが横眼でその「お若い紳士方」の方をみやり、言葉に注意しながらわたしにこういった。彼としての、わたしへのもてなしだった。シガーを遠慮すると、ぎらぎらする茶色の目の男は、馬鹿丁寧にお休みの挨拶をして部屋を出て行った。

アンブローズとサイラスの二人は愛想よく、自分たちのシガー・ケースを手にし、蓋をひらいて近寄ってきた。

「断つて、よかつたですよ」と、アンブローズがいった。「ジョン・ジェイゴといっしょにシガーをやるなんてとんでもない。奴のシガーの毒っ気に当たりますよ」

「それに、ジョン・ジェイゴのいうことなど、一言でも信じては駄目だ」サイラスが加えた。

「アメリカの大嘘つきで、構わない方がいい」

二人の男に、ナオミが人差し指を立てて咎めた。この頑健な農夫の若者たちが、まるで子供でもあるかのようだった。

「ミスター・ルフランクの前で、お父様が一目置いて信頼している人をそんな風にするなんて、どうかしているわ。さっさと、一服やりに行けばいいわ。恥ずかしいったらありゃしない」

サイラスは一言も逆らわずに出ていき、アンブローズはその場に留まり、ナオミを残して部屋を出て行く前にどうしても仲直りをしなければ、という様子がありありとみえた。

わたしがいるのが邪魔のようだったので、脇を通って部屋の奥にあるガラスのドアに向かった。出るとそこは手入れのいきとどいた、こじんまりした庭園で、ちょうど月の光が煌々と差しているところだった。この情景を楽しもうと外に出ると、楡の木の下にベンチのあるのが見えた。

目の前に広がるのは、自然がもたらす大いなる静謐だった。ついさっきまで家の中で目にし耳にしたことが、まるで嘘のように、それは言葉では言い表せないほどに荘厳で美しかった。わたしには理解できた。いや、理解できたと思っただ。人々が、人間であることに悲しくも絶望し修道院に向かったときがあったことが、その絶望が、分かったような気がした。わたしの人間嫌いの性格が首をもたげてきた。病人であれば、だれでも自分にこうした性格があるのを意識しているはずだが、それが襲ってきて、もはや耐えられない気分になってきた。と、このとき、そっと、だれかが肩に手をかけた。ナオミ・コールブルックだった。わたしはこうして、再び我らが人類と折り合いをつけたのだった。